

季節を感じる

1. キジバト

暖かい日、打吹公園や遊歩道を歩いていると、どこからかデデッポポー デデッポポーという鳴き声が聞こえてきます。眠くなるような声で、のんびりしようという気分になります。葉の茂みの中が多いのですが、電線でもよく鳴いています。

2羽のペアでいることが多く、地上に降りて餌を探している時も同じ行動をとっています。色彩は雌雄で違いが見られません。年中見られ、鳴くのですが、春の鳴き声は特に存在を感じさせます。

野生の鳥の多くは春に繁殖期を迎えますが、キジバトは年中繁殖します。鳥は、卵から孵化後(ふかご)1ヶ月もしないで巣立ち、独立します。早いものでは2週間です。短期間で親以上の体重



キジバト

になることから大量のタンパク質を必要とし、植物食の鳥であってもヒナには昆虫などを与えます。ところがハトの仲間とは異なり、親の食道の一部である「素囊(そのう)」が作る高タンパクの「ハト乳」と呼ばれるものを吐き出し、子育てをします。そのため、親の餌があればヒナは育つので、年中繁殖が可能なのです。1回の産卵は2個ですが、街中でもよく見られるほど数を増やせる理由です。

雨のかからないような茂みの中に小枝を組み合わせ、卵が落ちてしまいそうな雑な巣を作っていますので探して見ましょう。

2. シイタケ

2017年1、2月の大雪では、打吹山でもたくさんの樹の幹・枝折れがありました。常緑樹はもちろん、落葉樹でも枝の混んだ木には被害がありました。これらの枝はやがて朽ちて次代の若木の栄養となっていくのですが、その主となる働き手が菌類です。

スダジイが折れていました。シイといえばシイタケですが、ホダ木の栽培ではシイはほとんど使われず、倉吉では落葉樹のコナラが主流です。しかし、打吹山にはコナラは数本しかなく、シイタケは材の柔らかい樹には生えないため、シイ以外では見たことがありません。発生は秋と春ですが、春の方が多ようです。エノキタケと違い栽培種と同じ形態ですので、間違えることはないと思います。



自生のシイタケ

倒れて4年目くらいからきのこが発生します。樹が倒れた直後に飛来して付着したシイタケの胞子が、この間に菌糸を十分に増やしていることが必要です。カワラタケなどに先着されると負けてしまうようで、全てのシイの倒木に生えるわけではありません。太い樹であれば数年は採集できます。全部採集せず、新しい倒木へ胞子を飛ばせるように、少し残しておきましょう。

研究者によると野生のシイタケは少なく、栽培種が野生化しているものが多いとのこと。本場の野生種は、栽培種の品種改良に必要な多様な遺伝子資源なのです。